

パート・タイム

杉浦亮幸

PART I

荒涼たる原野の中を一直線に一筋の道が通
っている。時として吹き荒れる風は容赦なく

我々を沈黙させる。今、我々はあたかも夢遊
病者のごとく原野の中をさまよっている。果
たして、この先はどこまで続いているのたろ
う。三百六十度見渡す限りの地平線に一抹の
不安は隠せない。地球の地肌のような、この
デコボコ道だけが我々の頼りである。

やがて原野のオアシスなる原生花園に着く。
だがしかし、花が咲き乱れ、蝶が乱れ舞う、
あのディスクカバー・ジャパンゴとき世界を想
像した我々の期待は見事に裏返された。花園

にして花園にあらず。時、八月。この地にお
いては、もはや季節はずれ。頭上では我々を
あざ笑うかのように陽が照っている。何もな
い草原たる原生花園をあとに、我々は再び原
野の中の一歩道を進む。

遠くに海が見えて来た。日本海だ。砂浜に
自転車を倒し、我々は海を眺めた。あたりには
は人、子一人いない。荒れ果てた番屋だけが
潮風にさらされている。海の向こうには利尻
島が見える。一名、利尻富士。あたかも富士
山が海からぼっかりと頭を出しているようだ。
海が荒い。——寒く浪立つ日本海の遠く彼方
に利尻は浮ぶ——。我々はしばらく海を眺め
ていた。

そして再び自転車でまたがり、日本最北端

に向かつて我々の旅は続く。

——北海道・サロベツ原野——

* * * * *

PART II

重そうな鉄の扉が開かれる。愛車と共に我々は中へ入って行った。中には扉がある。バタンと後の扉が締まった。我々は上下四方鉄板で囲まれた大きな箱の中に閉じ込められた。すると、ギーンと音を立てて密室は動き出した。地下へ向かってもぐっている。一体どの位、地底深くもぐるのだろうか。閉じされた空間の中で不安と期待とが交錯し、我々は沈黙のままでいる。数分時間が過ぎた。もう百回はもぐ。ただらうか。まだもぐる。

やがてガタンと音を立てて停止した。目の

前の扉がストと開く。やや広い何も無い明るい空間が我々の眼に映った。慎重かつ速かに愛車をエレベーターから降す。窓一つない地下室というのは何となく無気味である。あたりを見渡すと一方向にトンネルが通じている。我々は愛車にまたがり、そのトンネルの中へ入って行った。

中は薄暗く、奥は真暗で何も見えない。不思議だが、ペダルを踏まないのに自然と前へ進んで行く。まるでトンネルの奥深くに吸い込まれて行くようだ。と、そこでハタと気が付いた。何の事はない、自然と前へ進んで行くのはトンネルが坂になっていてだけの事である。あたかも吸い込まれている錯覚に陥っ

てしまった。それにしても、一体どこまでこのトンネルは続いているのだろうか。

我々は今、海底下を走っているのだ。

——閉門トンネル——

* * * * *

PART III

熱くハンドルを握る手の甲にヒンヤリと冷たいものを感じた。雨が。とうとう降って来たか。息がねばならない。仲間はもうとっくに先へ行ってしまった。独りだ。だが、峠道はきつい。顔を歪めて黙々とペダルをこぐ。

やかて雨は本降りになつてしまった。しかし体むわけにはいかない。ただでさえ進みにくいジャリ道が雨に濡れてさらに悪路となる。

おまけに、流れ出る汗と降りしきる雨が容赦なく私の体温を奪う。つらい。やはり梅雨時に来たのは失敗だったか。小と、心の中にもなしさが横切る。孤独だ。たがしかし、重いペダルはいつも私に教える。自然と自分との戦いだ……。

すさまゆく吐息に限界を感じる。もうためだ、休もう。木の下で暫しの休息を取る。聞こえるのは雨音だけ。迫りくる自然の中で雨の音とそれによってすべてをかき消された静寂を感じる。雨に打たれ、いっさいの邪念を払う。無、無、無……。

ハッと気付く。現実に戻ると、愛車と共にびしょ濡れた。さあ急ごう。峠では仲間が首を長くして待っている。もし雨が止がれば峠か

らは富士山が見える筈だ。せあ行こう。身を
引き締め、そして再び黙々とペダルをこいで
行った。ただ独り、雨の降る飽びしい山間の
峠道を……。

——山梨・木賊峠——

* * * * *

PART IV

「どっから来たんかい。」

ここの川瀬という小さな部落でこれから峠を
目指そうと暫しの休息を取っている、うし
ろの方から杖を突きながら一人のおばあさん
が歩いて来た。

「うちでお茶でも飲んできたせえ。」

「はい、どうも。」

せっかくなのでお邪魔することにした。田
舎の古ぼけたその農家に入ると、中は薄暗
く年期が感じられる。

「昔は女工さんがよく来たもんだ。」

ここは昔は旅館を置いて、峠を越えての
あの女工哀史をお茶をすすりながら話して
来た。しかし、今はその面影はなく小鳥のせ
えざる静かで小さな山村にしかすぎない。

「どうもごちそうさまでした。」

爽やかな秋空を見上げ、私は走り出した。

——野麦街道——

LAST

「あっ、御岳が見えない……」がク。

その日は曇り空であった。

——木曾・地藏峠——